

# 自閉スペクトラム症者のコミュニケーション支援としてのユーモアに関する研究：ツッコミの機能に着目して

脇浜，幸則

<https://hdl.handle.net/2324/7182274>

---

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（心理学），課程博士  
バージョン：

権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名 : 脇浜 幸則

論 文 名 : 自閉スペクトラム症者のコミュニケーション支援としての  
ユーモアに関する研究—ツッコミの機能に着目して—

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、自閉スペクトラム症（以下 ASD）者のコミュニケーション支援としてのユーモアの有用性について、本邦で用いられている「ツッコミ」の機能に着目した検討を行い、ASD 者の臨床的支援への示唆を得ることを目的とした。第 I 部（第 1 章～第 6 章）では、ASD 者のコミュニケーションに関する先行研究を概観し、ユーモアの有用性について述べた上で、ASD 者のユーモアを「理解」・「体験」・「表出」という 3 つの観点で分類して概観した。その結果、ASD 者は前後の文脈や刺激の全体像を統合して理解する必要がある場合には、ユーモア理解の難しさからユーモア体験が生じにくくなる場合があること、典型発達（以下 TD）者とは異なる観点からおもしろさを理解（ユーモア評価）しやすいことが示された。これらの特徴から、本論文では ASD 者のユーモアの促進要因として、「ツッコミ」に着目した。ツッコミはユーモア刺激のどこがおもしろいかを明示・強調する言及である。そこで、本論文ではツッコミを「違和感を生む表現に言及が加えられるときに、その言及がずれを含むものであることや、どの点でずれているのかを、笑顔や誇張した表現を伴い伝えることで、おもしろいという一過性の愉悦の情動体験を生じさせる指摘」と定義した。ツッコミはユーモアのみならず、失言や言い間違いに対しても用いられるため、ツッコミは「ユーモア場面」と「コミュニケーションの齟齬場面」で適用可能であると考えられた。

しかしながら、ASD 者支援を「ユーモア」という観点から検討した研究は非常に少なく、「ツッコミ」が ASD 者のコミュニケーション支援でどのように適用しうるかに関する研究は皆無であった。そこで、本論文では「ツッコミ」の機能に着目し、ASD 者のコミュニケーション支援におけるユーモアの有用性を検討した。

第 II 部（第 7 章～第 10 章）では、ASD 者支援としてのユーモアとツッコミの機能について検討を行った。まず、支援に積極的にユーモアやツッコミを導入している支援者を対象にインタビュー調査を行い、ユーモアとツッコミの有用性、およびどのような場面で適用しうるのかを検討した。その結果、ユーモアは「QOL の促進」、「認知的柔軟性の向上」、「コミュニケーションの促進」という 3 つの機能があることが示された。これは TD 者に示されたユーモアの機能と同様であった。ツッコミは、「ASD 者と他者とのユーモア共有の促進」、「ASD 者の行動調整の促進」という 2 つの機能があることが示された。そこで、第 8 章、第 9 章では、それぞれユーモア場面と社会的失言場面でのツッコミの機能を検討した。

第 8 章では、ユーモア場面におけるツッコミが ASD 者のユーモア理解（ユーモア評価・オチの理解）とユーモア体験（おもしろいと感じる強さ）に与える影響について検討を行った。その結果、①ツッコミがない場合には、ASD 者は TD 者と比較するとオチの理解が難しいが、ツッコミがある場合には、オチの理解が促進され、TD 者とオチの理解度に差が見られないこと、②ツッコミは ASD

者のユーモア評価には影響を与えず、ツッコミによっておもしろいと判断する理由や箇所は変容しないことが示された。そのため、支援においては、ASD 者がよりユーモアが生起しやすいツッコミを用いることが重要であると考えられた。

第 9 章では、社会的失言場面におけるツッコミが ASD 者の失言検出と生起感情に与える影響について検討を行った。その結果、なぜその発言をするべきでなかったかを言語的に明示するツッコミの場合、高い割合で失言検出がなされることが明らかになった。生起感情については、ASD 者はツッコミがおもしろさを意図した発言であると理解することが難しい場面があるものの、ツッコミが「おもしろい」、「楽しい」、「安心」というポジティブ感情を強め、「気まずい」、「後悔」というネガティブ感情を弱めることが明らかになった。そのため、ツッコミにおけるユーモアの意図が共有された場合には、失言に対する支援者の介入を ASD 者が過度に自責的に受け取ることなく、より肯定的な対人関係の中で失言を理解し、行動調整につながっていくと考えられた。

第 10 章では、ユーモアとツッコミが ASD 者の行動調整や、ASD 者と Th の関係性の変容に与える影響を明らかにするため、小学校 5 年生の男子 A との個別事例（プレイセラピー）の検討を行った。その結果、ASD 者とのラポールの形成や、ポジティブ情動の共有体験が十分になされている場合には、ユーモアによって ASD 者が他者とのコミュニケーションそのものに楽しさやおもしろさを見出していき、相互的なコミュニケーションにつながっていくことが示された。また、支援者に生じた気持ちを言語化しながら指摘するツッコミは、よりポジティブな対人関係の中で ASD 者が自らの言動を振り返ることにつながると考えられた。

第Ⅲ部（第 11 章～第 12 章）では各章の研究について概要をまとめ、本論文の成果について総合的な考察を行ない、ASD 者のコミュニケーション支援におけるユーモアとツッコミについて論じた。まず、支援においては ASD 者の状態像やユーモアの「独自性」をアセスメントし、関係構築をすることが重要であり、それらがなされた上で、ユーモアを共有することで、ASD 者がより自発的に他者とコミュニケーションを取ろうとすることにつながると考えられた。しかし、ASD 者はその特性からコミュニケーション上の齟齬が生じることがある。これらの場面では、支援者に生じた気持ちを言語化するツッコミを行うことで、ASD 者の言動を「支持」しつつも、他者の気持ちや想定していた言動を「指示的に」伝えることも可能になると考えられた。しかしながら、これらのユーモアやツッコミが、ユーモアとして共有されにくい場合もあるため、必要に応じて支援者のユーモアの意図を言語化して伝えるなどの臨床的な工夫も必要であると考えられた。

従来の ASD 者支援は適応的な行動やスキルの獲得が中心であったが、「ユーモア」や「ツッコミ」という観点から検討を行い、「ポジティブな対人関係」によって、結果として ASD 者のコミュニケーションが促進されることを示した本論文は、ASD 者のコミュニケーション支援のあり方に関する視座を与えると考えられる。

本論文の今後の課題は、まず、ASD 者のユーモアの「独自性」について、より ASD 者がユーモアが生起しやすい刺激やツッコミを明らかにすることである。また、ASD 者のユーモアに関する研究は、ASD 者が周囲の他者のユーモアをどのように理解するかに焦点化されていたが、今後は周囲の他者が ASD 者のユーモアをどのように理解、体験するかを明らかにすることも課題である。これらを明らかにすることで、ASD 者と周囲の他者が相互に理解する共生社会の実現につながると考えられる。